河北新報　2023年（令和5年）11月5日（日曜日）

東日本大震災 12年

被災経験ない東北大生、大川小で語り部活動

葛藤抱えつつ伝承への一歩

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲になった石巻市の震災遺構「大川小」で、東北大の学生たちが語り部活動を始めた。被災経験のない宮城県外の出身者が多い。当事者でない自分が震災を語ることに葛藤を抱えつつも、震災伝承の活動を後世に残すため一歩を踏み出した。（石巻総局・松村真一郎）

「家族や友人と地震に遭ったらどこに避難するか、どのように安否を確認するかを普段から話し合っているでしょうか」

東北大のボランティアサークル「SCRUM（スクラム）」に所属する1～3年生4人が10月22日、大川小の旧校舎でガイドを務めた。参加者約30人に児童が避難したルートや裏山を案内し、震災前の学校生活の様子や事前防災の必要性などを説明した。

参加した群馬県桐生市の養蚕業松井定夫さん(70)は「伝えたいという思いを感じた。これからも続けてほしい」と感心した様子だった。

スクラムは以前から、旧校舎の清掃活動や児童の遺族らでつくる「大川伝承の会」の定期ガイドに参加。案内役が少ないことや後世に語り継ぐことに課題を感じていた伝承の会から提案があり、9月から語り部を担うようになった。

学生のほとんどは宮城県外出身で、震災で被災はしていない。伝承の会が案内で話す内容などを原稿にまとめてガイドに臨む。

埼玉県出身の2年坂井宏羽さん(19)は「被災者ではないので自分がやっていいのか葛藤はあったが、震災を語る活動が絶えないように手伝いたいと思った」と胸の内を明かす。

2年後藤太朗さん(20)は「まだまだ自分たちの言葉で伝えられていないので、参加者が知りたいことも盛り込みながら話せるようにしたい」と力を込めた。

活動を見守った伝承の会共同代表の鈴木典行さん(58)は「私たちの言葉を学生が頑張って話してくれて胸に迫るものがあった」と目を細めた。

次回の語り部活動は今月26日午後1時と午後3時に実施する。いずれも申し込み不要で参加無料。

震災発生時の大川小を説明する東北大の学生たち（右の２人）